

# 反核医師の会ニュース

HANKAKU  
ISHI no KAI News

Physicians Against Nuclear War(PANW)  
核戦争に反対する医師の会  
〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-5-5  
新宿農協会館 全国保険医団体連合会内  
電話 03(3375)5123 FAX 03(3375)1862  
e-mail: panw@doc-net.or.jp  
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

## 被爆80年 反核平和運動・被爆者支援・ 被爆医療の歴史を学び継承しよう！



会場いっぱいの参加者

広島・長崎に原爆が投下されて80年の節目の年である昨年の第35回反核医師のつどいin東京は、被爆80年、反核平和運動・被爆者支援・被爆医療の歴史を学び継承しようというテーマのもと開催された。今回は代表

### 2日間全体のまとめ

実行委員長 向山 新

反核医師の会は、昨年8月30、31日に、東京都内で「第35回反核医師のつどいin東京」を開催した。メインテーマは「被爆80年 反核平和運動・被爆者支援・被爆医療の歴史を

学び継承しよう！」シンポジウム、学習講演、齊藤とも子による記念講演、若手による特別企画などが行われた。概要を報告する。

### 第一部 シンポジウムと学習講演 —被爆80年、被爆者運動・被爆者医療の歴史を継承する

#### 1日目 シンポジウムと学習講演

1日目の最初のプログラムは、シンポジウム「被爆80年、被爆者運動・被爆者医療の歴史を継承する」だつた。日本被團協の田中熙巳さんと、被爆者医療に長年取り組んでこられた齋藤紀先生と、いっぽプロジェクトの2名の若者のディスカッションだった。

田中さんは、被團協が結成されるまでの、占領下の7年、その後も日本政府が何もしてくれなかつた3年、被爆者として声を上げ

ることもできなかつた苦悩をお話いただいた。被團協は原爆被害の実相を訴え、核廃絶を求めるとともに、国が始めた戦争によつて起きた原爆による被害だから、国が補償しなければいけないという運動を続けてきた。核兵器禁止条約はできたが核兵器があれば使われる可能性が十分ある。核兵器廃絶の運動の継承は、ただ被爆者の話を伝えるだけでは無くて、それ

を活かして自分の要求や、

田中熙巳さん（左）と齋藤紀先生（右）

### 第35回 反核医師のつどい in 東京（8／30、31）

184人が参加  
(オンラインを含め)

ガソツ線

日本被團協が  
2024年にノーベル平和賞を受賞したが、一年以上たつた今もその感動は薄れていない。被團協こそが、伝統と権威あるノーベル平和賞を受賞するのにふさわしいということに異論はないだろう。海に向こうでは、あのトランプ氏が同じ賞を欲しがっているという。日本の新首相も「推薦する」とトランプ氏に伝えたという。これがただ漫才ならば、くだらない、と言つて無視することも可能だが、両国のトップ同士の会話なのでそうもいかない。何故トランプ氏はノーベル平和賞を欲しがるのだろうか。すでに自分の中だと思つてゐるから。お金は充分あるから今度は名誉が欲しくなつた。ノーベル平和賞は金儲けになる。いずれもありそうな話だが、どうも説得力に欠ける。核兵器廃絶運動や平和運動をよく知らないトランプ氏だが、彼のお得意の大統領令を使つても、被團協、ICAN、IPPNWからノーベル平和賞を剥奪することはできない。だとしたら、ノーベル平和賞を最も価値のない意味のないものにするためには、自分自身が受賞することだと考へたというのはどうだろうか。発想が飛躍し過ぎている。こんなくだらない漫才についている。(Y)

(1面のつづき)  
して権威を持った人ではなくて、同じ市民として活動していくことを大事にしたいという想感がありました。斎藤先生からも、被爆者を偶像化してはいけない。偶像にしてしまった瞬間に何かがちょっと違ってくるのではないかと。被爆者もやはり広島長崎で普通の市民として市井の人として生活をしていましたので我々と共に通である市民の1人としての喜怒哀樂悲しみと共通の部分があるから我々は戦えるという発言もあつた。

また、斎藤先生が「挫折したことではないか」という質問に対して、「挫折はないんです、被爆者が挫折しませんから。だから支える側に挫折はない」とした。

ロシアのウクライナ侵略、イスラエルのガザ地区のジェノサイドなど、軍事力の行使と核兵器使用の威嚇が行われております、核戦争の危機が迫ります。



左からコーディネーターの向山先生、医学生

## 第2部 「原爆裁 判」を現代に活かす

兵器も戦争もない世界」を創るために」というテーマで、日本反核法律家協会会長の大久保賢一弁護士に教育講演をお願いした。

ロシアのウクライナ侵略、イスラエルのガザ地区のジェノサイドなどで軍事力の行使と核兵器使用の威嚇が行われておなり、核戦争の危機が迫つ

2022年の国家安全保障戦略などで米国の核の傘の下で防衛力の抜本的な強化が行われ、参政党などを中心に日本の核武装を主張する政党も出現している。このような世界が再び核戦争に向かう危機感の中で、ノーベル平和委員会が日本被爆者に2024年のノーベル平和賞を授与した。この

全世界の人々に共感を広げている。

アメリカの原爆投下が国際法上違法であると認めさせる論議において、原爆裁判の果たした役割は大きい。原爆裁判とは、1955年下田氏らによる原爆投下は違法であり、講和条約によつて対米請求権を放棄した日本政府に

A black and white photograph of Lawyer Ochiai Kōji. He is an elderly man with dark hair, wearing a striped shirt. He is holding a microphone close to his mouth, suggesting he is giving a speech or lecture. The background is plain and light-colored.

な苦痛を与えてはいけないという戦争法の基本原則に違反しているとしたが、原告の請求は棄却した。その理由は、国際法上の権利を持つのは、個別の条約で認

日講和条約によつて、一告が失うものはないといふ決した。

つて、1995年被憲  
援護法が制定された。  
だし、この援護法は、  
兵器の廃絶を「究極的  
として永遠の彼方に沿  
やり、戦争被害と原凶  
弾による被害を差別化す  
るなど、いくつかの明確  
点をもつているが、ヒ  
クシャの国家補償を受  
る運動の一つの到達点  
なった。

がれた。そして、それがされた。そして、その  
2017年7月7日  
連での核兵器禁止条  
採択となり、現在、  
・批准国が広がつて、  
しかし、現在、核  
タンは、トランプや  
チンに握られている  
事実である。日本国  
は、「平和を愛する  
民の公正と審議に信

しないし、日本は軍隊の行使していない。「時代」の非軍事的である憲法の9条を、「原爆裁判」を争もしない世界を一刻く実現しようと結て、講演を終わらし、代表世話人 原

力範台約ノイ戦早人。されられ。大森について活動について、その後の、きのこ会導き、肥田舜大出会い、斎藤さんの被爆の訴えを紹介され繰り返してはならぬことをこのようなことをおして事実を残し、暴力と戦い、裁

ての憂愁哀樂悲しみと共  
通の部分があるから我々  
は戦えるという発言もあ  
った。

いう回答に、医学生の松久凌大さんが力強い言葉をいただいて、偉大な先生方の歴史の上に立てる」と心強く思うというやりとりが印象的であった。

左から  
の松久  
原爆被災の医学的背景、裁判の経過、福島との関連など、様々な問題が話題となつたセッションとなつた。

れ、子育てをしながら大検をへて東洋大学社会学部社会福祉学科に入学し修士課程まで学ばれた経歴を持つ。

ちようど大学入学の時期に、井上ひさし氏の「父と暮らせば」という芝居で、罪の意識を持ちながらも亡くなつた人の分ま

爆体験を聞き、その方の  
つてで更に多くの被爆者の  
の体験を伺うことになつた。  
た。被爆者はいつも下を  
向いて暗い表情をしてい  
るわけではなく、心と体  
に傷を追いかがらも明るく  
前向きに生きているこ  
とを知り、このことは幸  
藤さんにとって、自分自

身の心が救われる体験もなった。これが被爆者との最初の出会いであった。

もっと知りたかった。そして修士論文では、胎被爆の問題を学びたいと考え、鎌仲ひとみ氏の介で、肥田舜太郎医師直接会って相談することになった。その時の肥田医師の対応は、「自分修士論文のために被爆

斎藤さんの思いが肥  
師にも伝わり、いろ  
な方を紹介されるこ  
なつた。

の医ろとらなこ族り

ない、自分を責めることはない、原爆のせだと語る姿に感銘を受けていた。修士論文で取り上げた原爆小頭症の子供たちは、生まれた時には生きられない、学調の影響と言われて、とともにひとつそりと書かれていた。

## 2日目 肥田舜太郎との交流（斎藤とも子氏の講演）

記念講演の斎藤とも子さん





2025年3月に参加した第3回核兵器禁止条約締約国会議に、日本から若い世代の参加者が多く、各団体がそれぞれのアプローチから核兵器禁止条約を前に進めようと、意欲的に参加している姿がとても印象的だ

た。他団体とのつながりを広げつつ、締約国会議で感じた核兵器禁止条約の盛り上がりをつどいの場で共有したいという思いから、今回の企画が始まった。ゲストは締約国議に参加されていた、カクワカ広島（核政策を



## 反核医師のつどい in 東京に 参加して

いっぽプロジェクト 山梨 窪田 由和子

まずは印象に残ったのは初日のシンポジウム「戦後80年 被爆者運動・被曝医療を継承する」にて日本被団協代表委員の田中熙巳さんが言われた「ただ被爆者の言葉をそ

は、SNSの発信の工夫や地域に密着した活動を継続的に行つて、いくことで、国際的なつながりを一回で終わらせずに定期的な交流をもつことなど、各団体の活動で大事にしていることが出されました。ゲストの皆さんからは、SNSの発信の工夫や地域に密着した活動を継続的に行つて、いくことで、国際的なつながりを一回で終わらせずに定期的な交流をもつことなど、各団体の活動で大事にしていることが出されました。

いっぽプロジェクトでは、核兵器禁止条約をどう進めていくかが真剣に話し合われ、核被害者国際基金など具体的な行動計画が進行しているのを感じました。その一方で、帰国後の

被爆者が減り、戦争を経験していない世代だけになる将来が近づいているなか、今回のつどいのテーマは「継承」となった。いっぽ企画の中でも、これまで被爆者が先頭に立ってきた反核運動をどう引き継いでいくのかが話し合われた。私自身は、前日の企画で被団協の田中熙巳さんの「次世代の皆さんは自分たちなりの運動をつくつていってほしい」というメッセージを思い出しながら、皆さんのお話を聞いていました。ゲストの皆さんから

ABC for Peace (いっぽプロジェクト) では、「反核医師のつどい in 東京」のオプション企画として「核廃絶Café」を開催した。つどい2日目の

た。仕事をしながら活動を続けていくことの難しさについては共感の声が多く、活動を模索する必要性も共有された。被爆者の平和への思いを、自分事として受けとつてもうえん改めて感じた。

日本国内では核兵器禁止条約報道は少なく、まだまだ関心も薄いように感じた。そんな悔しさも原動力に、自分たちで核兵器禁止条約の盛り上がり

た。仕事をしながら活動を続けていくことの難しさについては共感の声が多いが、依然として受けとつてもうえん改めて感じた。

日本国内では核兵器禁止条約批准に向かう確実ないつぽであると確認することことができた。核兵器禁止条約はつくる過程も大事にされている条約だ

めの輪を広げるなどが、条約批准に向かう確実ないつぽであると確認することことができた。核兵器禁止条約はつくる過程も大事にされている条約だ

が、今回の企画も条約を育てていくことに貢献できたのではないかと思ふ。今後もいっぽ歩みを進めていきたいなと思った。

## 反核医師のつどい in 東京

2025年3月に参加した第3回核兵器禁止条約締約国会議に、日本から若い世代の参加者が多く、各団体がそれぞれのアプローチから核兵器禁止条約を前に進めようと、意欲的に参加している姿がとても印象的だ

た。他団体とのつながりを広げつつ、締約国会議で感じた核兵器禁止条約の盛り上がりをつどいの場で共有したいという思いから、今回の企画が始まった。ゲストは締約国議に参加されていた、カクワカ広島（核政策を

いた。他団体とのつながりを広げつつ、締約国会議で感じた核兵器禁止条約の盛り上がりをつどいの場で共有したいという思いから、今回の企画が始まった。ゲストは締約国議に参加されていた、カクワカ広島（核政策を

いた。他団体とのつながりを広げつつ、締約国会議で感じた核兵器禁止条約の盛り上がりをつどいの場で共有したいという思いから、今回の企画が始まった。ゲストは締約国議に参加されていた、カクワカ広島（核政策を

## いっぽプロジェクト企画 私たちの平和と政治 荒木さくら

いっぽプロジェクト 荒木さくら



知りたい広島若者有権者の会の田中美穂さん、Genuineの徳田悠希さん、元NO NUKES TOKYOの本間

のどかさんをお呼びして、いっぽメンバーとの座談会企画（以下、いっぽ企画）を行った。

被爆者が減り、戦争を経験していない世代だけになる将来が近づいているなか、今回のつどいのテーマは「継承」となった。いっぽ企画の中でも、

これまで被爆者が先頭に立ってきた反核運動をどう引き継いでいくのかが話し合われた。私自身は、前日の企画で被団協の田中熙巳さんの「次世代の皆さんは自分たちなりの運動をつくつていってほしい」というメッセージを思い出しながら、皆さんのお話を聞いていました。ゲストの皆さんから

ABC for Peace (いっぽプロジェクト) では、「反核医師のつどい in 東京」のオプション企画として「核廃絶Café」を開催した。つどい2日目の

たが、つどい本番の座談会「いっぽプロジェクト企画」として受けとつてもうえん改めて感じた。

全国からの参加者が集まり、初対面の参加者も多かつたが、交流ではテーマを決めずにつどいの

な場づくりを目指した。全国からの参加者が集まり、初対面の参加者も多かつたが、交流ではテーマを決めずにつどいの

な場づくりを目指した。全国からの参加者が集まり、初対面の参加者も多かつたが、交流ではテーマを決めずにつどいの

いっぽプロジェクト企画



## 核廃絶 Café

いっぽプロジェクト 稲原 真一



8月31日 (日) の午後、閉会からそのまま

前日の夜はメンバーで集まって設営し、飲み物やお菓子などを購入。受付や会計、司会なども分担して、それぞれのメンバーが役割を持って関わった。当日、参加者は30名が集まり、8階会議に

平和と労働センターの会場となりた。その後は「次のいっぽ」で活動している中で、身近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、

や、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、

近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、

近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言ふ人たちと、



藤ともじさんがどのような姿勢、思いで被爆者の方と共に歩んできたのか知ることができた。齊藤さんの言葉は正に自らの経験を通じて発せられた言葉であり、深く心に刻まれた。これこそ、眞の継承の姿を感じた。つどいの終了後はABC for Peace (いっぽプロジェクト) 主催の「核廃絶Café」に参加した。私は今、山梨県でKAICAN（核なき世界）を立ち上げ、活動を始めた。まだ生まれたばかりの小さな会だが、私なりにいっぽいっぽ進んでいきたいと思う。





「黒い雨」ワークショップの様子



被災協の皆さんと

大雨区域の6倍となり「大瀧雨域」と呼ばれている。国に拡大を求めたが「科学的根拠がない」として却下された。

黒い雨被爆者たちは2015年11月に広島地裁に提訴して勝訴した。2021年7月に広島高裁も原告は黒い雨を浴びており被爆者に該当すると全員勝訴の判決を出して確定した。

2022年からは3号被爆者(原爆放射線の影響を受けるような事情にあつた方)に「広島『黒い雨』被爆者訴訟の『原告』と同じような事情にあつたと認められる方」が加えられ2025年9月末までに全国で726人が認定された。長崎でも援護の拡大が期待されましたが、国は「広島で黒い雨に遭つたこと」を要

りに認めた。心より感謝申し上げた。大会に続いて今回の長崎大会に参加することになりました。心より感謝申し上



## 核廃絶運動を前進させる「若手の連帯」

松本協立病院 研修医 田村 大地

2022年4月に23人が広島地裁に提訴して第2次訴訟を起こし原告は84人に増えている。

長崎では2007年から度提訴して福岡高裁でたたかっている。

「被爆者」と認められることを求めて提訴し2017年に最高裁で敗訴したが、諦めない44人が再度提訴して福岡高裁でたたかっている。

「広島黒い雨訴訟」も「長崎被爆体験者訴訟」も被爆の実相を過小評価しようとする国の施策とのたたかいであり、核兵器の廃絶と世界平和のためにも2つの訴訟の勝訴をかちとりうと訴えた。

「広島黒い雨訴訟」も「長崎被爆体験者訴訟」も被爆の実相を過小評価しようとする国の施策とのたたかいであり、核兵器の廃絶と世界平和のためにも2つの訴訟の勝訴をかちとりうと訴えた。

長崎大学医学部資料館では三根先生(長崎大学原爆後障害医療研究所)の案内で、被爆当時の医療従事者の奮闘、そして人体への影響を詳細に学んだ。特に映像による被害の再現は衝撃的であり、核兵器がもたらす

歴史と向き合つた事前フィールドワーク

大会開始前には、世界からの参加者を迎える立

場として、私たちPAN Wの若手でフィールドワーク(FW)を企画・実

施した。国内外から計22名が参加し、被爆の地を巡ることで、核兵器がもたらす不可逆的な悲劇

アーノードワークでは、原爆

や平和への思いが深く交差した。道中には、各國政府に要請するための私たちの要請文(政治家宛のレター)を作ろうという提起があり、私たち自身が行動するための真剣なディスカッションが行われた。個性豊かな交流を重ねたこの時間は、核廃絶への決意を固く結びつける強固な土台となり、

感築いてくれる国際的な連帯

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあつた若手有志主催の長崎でのフィールドワークとStudent Congressのみだったが、本当に濃く充実した一週間を過ごした。医師や医学生が国際的な動きを生み出し、核兵器廃絶

I-PPNW世界大会に参加した医学生の感想

たの長崎での学びが、今後の各国での活動の糧

にならしていくことを心

から願っている。

たの長崎での学びが、今後の各国での活動の糧

になら願っている。

たの長崎での学びが、今後の各国での活動の糧

## 【5面から続き】

させていた。しかし、話を専門家から直接聞くことで、核抑止という考え方がいかに脆弱で危険なものであるかを深く理解した。

医療者を志す私にとって、最も印象的だったのは「医療者が果たすべき役割」である。核兵器は一度でも使用されれば、人類が持ついかなる医療体制でも対応不可能な破壊をもたらす。だからこそ医療者は、科学的根拠

に基づいて核の非人道性を社会に伝える役割を担っている。特に日本は唯一の被爆国であり、広島と長崎の記録と記憶を世界に伝えることは、私たち日本人に特に求められた使命だと感じた。

一方で、会議に参加して痛感した自身の課題もある。それは英語力である。日常会話であれば問題なくコミュニケーションが取れるが、専門的な議論になると理解が追いつかず、悔しさを覚える場面が多かった。核廃絶

問題を「遠い世界の問題」として捉えるきっかけとなつた。世界には核によって苦しむ人々が今も存在

するときには、より主体的に議論に加われるようになりたい。



長崎大学 6年 森 爽

本世界大会には学生部会から4名の学生が参加した。忙しい学業や実習の合間に縫つて長崎へと足を運んでくれたことを心から嬉しく思う。大会での詳細な内容は他の方々へと譲ることとして、ここでは印象に残っている出来事を紹介したいと思う。

一つ目は世界の医学生たちとフィールドワークを開催したことだ。13年ぶりとなる国内開催にあわせ、学生部会でも何かできないか、と話が出た

長崎はおろか日本に来るのもはじめてという学生が多く、居酒屋やナイトクラブに行つてみたり、京都や大阪にも行ってみたい、と笑いながら話す彼らは若者然としていて気さくな人たちという印象だった。しかし、約2時間のフィールドワーク中、ガイドや遺跡を見入るその眼差しの真剣さを見るにつけ、自分たちはただかい引き継いでくれと訴える被爆者か

のバトンを渡す。新旧ISRNの代表は、みな次番手以降のための風除けとなり、そのままもなく終わらうことなく、その後の学生たちにつながつているのだと信じて、駆け抜けたレースの役目を降りようと思う。そして、この6年間の活動をしまいこむことなく、私なりのいっぽ踏み出し続けたいと願う。

最後に、本大会参加ならびにFW開催にあたってご支援頂いた反核医師の会の皆様に深く感謝申し上げる。

このテーマは国際協働なしには前に進まない。そしてその協働を可能にするのは、国境を越えて意思を共有するための言語、つまり英語である。この同じくらい、英語というツールを磨くことで自分にとって必須なのが強く感じた。

今回の国際会議は、核問題を「遠い世界の問題」として捉えるきっかけとなつた。世界には核によって苦しむ人々が今も存在するときには、より主体的に議論に加われるようになりたい。

自分がISRNを卒業してからもう20年の歳月が経つてしまつた、と微笑みながら、当時は無謀と思われたその企画が今では伝統になつていることに触れ、「自転車競技をやったことがある人なら分かるが、レースというのは常に一位を走り続ける必要はない。先頭を走る選手は、みな次番手以降のための風除けとなり、その座を譲る。そうやって、より遠くを目指すのだ」。そして彼はどうかこれまでの活動をPCのデスクトップフォルダにしまい込んでくれ、と続けた。

「経験を積んだ医師がもう必要のないものとして医学書や解剖学の教科書を本棚にしまいこんでしまうように、あるいは後



## 「Don't Bank on the Bomb」キャンペーン

IPPNW世界大会で交流  
日本の活動に会場から拍手

日本でのとりくみについて報告する松井氏（右端）



DBOBブースで海外参加者と交流する反核医師の会のメンバー



20人を超える医師・歯科医師が参加した長崎駅前の街頭宣傳

反核医師の会は「Don't Bank on the Bomb」（核兵器にお金を貸すな、DBOB）キャンペーンの普及と国際的な連帯の強化を目的に、10月21~4日に長崎で開催された第24回核戦争防止国際医師会議（IPPNW）世界大会に参加した。

2日夜には、長崎駅前で街頭宣傳を実施し、20人を超える医師・歯科医師らが参加。韓国の医師とも連携し、「核兵器製造企業への投融资をやめよう」と力強く訴えた。この行動はテレビ長崎、長崎国際テレビ、共同通信が取材し、翌日のテレビニュースやYahoo!ニュースでも報道された。

会場ではDBOBの活動を紹介するブースを設置し、核兵器関連企業への投資の実態を伝えるパンフレットを海外参加者に配布。平和へのメッセージを書いてもらう取り組みを通じて約90人と交流した。ブースには、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）のメリッサ・パーク事務局長、同初代代表のティルマン・ラフ氏、同国際運営委員の川崎哲氏、IPPNW共同代表のカルロス・ウマニヤ氏らが訪れ、世界の核廃絶運動を牽引する人々と直接つながる貴重な機会となった。

4日に開かれたDBOBは、医師が核兵器廃絶運動に取り組む意義、DBOBキャンペーンについて語った。IPPNW世界大会の様子や企画に松井氏が出演し、「PPNW世界大会の様子や医師が核兵器廃絶運動に取り組む意義、DBOBキャンペーンについて語った。一連の活動を通して、DBOBキャンペーンへの共感が国内外で広がり、核廃絶に向けた市民と専門職の国際的連帯をいつそう深める契機となつた。



